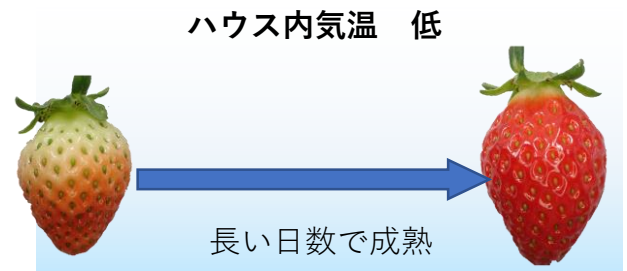
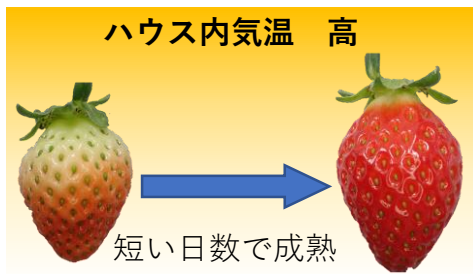


県育成イチゴ3品種の成熟日数と気温の関係

野菜育種担当 尾田秀樹

背景・目的

イチゴ果実の着色は光強度と気温により促進されることが知られています。特に気温の影響は大きく、ハウス内の気温が高く推移すると果実の着色が早く進み、低いと逆に遅くなります。果実着色と果実成熟を同義と捉えるとハウス内気温の推移から果実の成熟日数の長短を予測することができます。



県で育成した「埼園い1号」（かおりん）、「埼園い3号」（あまりん）および「べにたま」には開花時期に差がありますが、収穫開始時期の差はより大きくなります。これは成熟日数の長短が関係していると考えられます。そこで、県育成3品種と県内主要栽培2品種の成熟に必要な積算温度を比較しました。

試験方法

◆ 供試品種



埼園い1号
(かおりん)



埼園い3号
(あまりん)



べにたま



品種A



品種B

◆ 調査項目

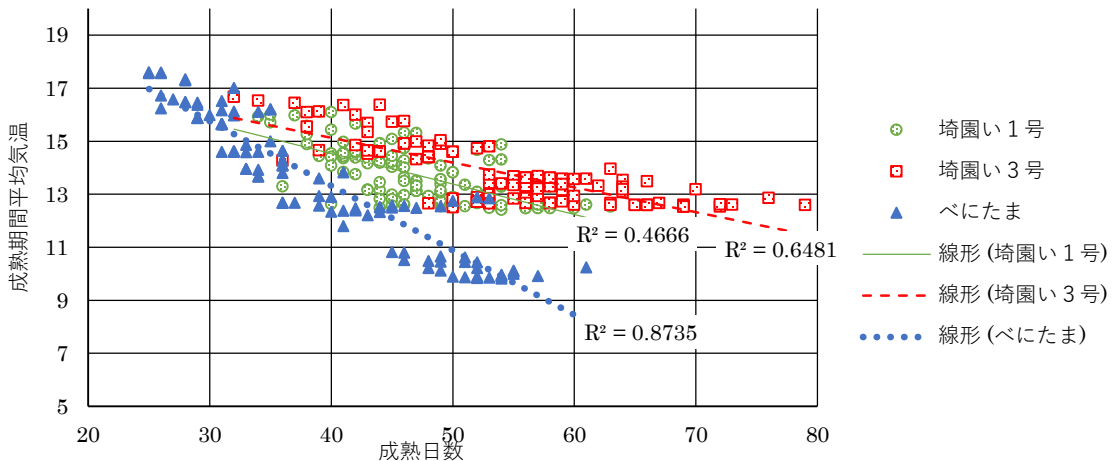
成熟日数：20g以上の果実の開花から収穫までの日数

日平均気温：1時間ごとの果実着生付近の気温を日ごとに求めた平均値

積算温度：成熟期間中の日平均気温の累積

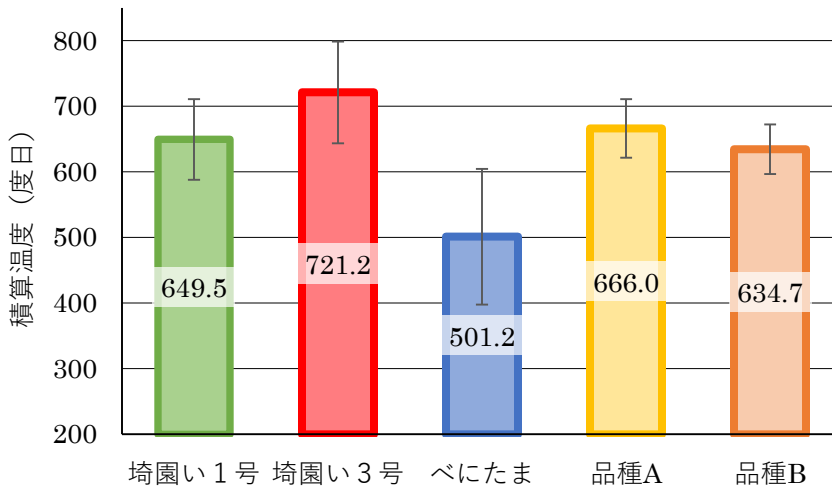
結果および考察

◆ 成熟日数の比較



- 開花から収穫までの気温が低いと成熟日数が長くなります。冬季には果実の着色が遅くなりますので、この結果と合致します。

◆ 積算温度の品種比較



グラフ内部の数字は、それぞれの積算温度を示す。
バーは標準偏差 (SD) を示す。

- 県内主要品種と比較した場合、「埼園い3号」は、積算温度が高く、成熟日数が長くなる傾向にあり、「べにたま」は積算温度が低く、他品種に比べ成熟日数が短いと考えられました。

今後に向けて

積算温度に基づき、開花後の予想されるハウス内気温から収穫時期の予測が可能となり、計画的な出荷や観光摘み取り園における集客に利用できると考えられます。また、各品種における成熟の遅速に関する知見は、栽培品種の構成を考えるうえで参考とすることができると考えられます。